

はじめに  
オリンピックピックとは何か？

リバプール・ストリート駅からバスで10分ほどのアパート。中心街の東側・イーストロンドンに逗留とまりゆしていたときのことだ。

まだ時差ボケが抜けきらない。夜明け方、パツチリと目が覚めて変な時間に起き出した。カーテンを開けて、まだ薄暗いロンドンの裏通りを何とはなしに眺める。すると停められた車の陰から細身の犬がゆったりと道路の真ん中に出てきた。こんな時間に飼い主から離れて、たったひとりで大丈夫か……と同情したが、ヤツに不安な感じは一切ない。それどころか、凜として堂々としている。

さては、このあたりのボスか？

道を渡って、街灯の明かりに照らされたときに、やっと正体がわかった。

「Fox」キツネだった。

人口約800万人の大都市・ロンドン。その繁華街をキツネが歩く。周囲には、鬱蒼うつそうと木立の生い茂った公園がけっこうある。きつとそんなところを罫わだかにしているのだろう。ロンドン五輪のテニス会場になるウィンブルドンの森には、リスやキツネ、フクロウなどたくさん動物が棲すんでいる。街なかにキツネが出没するのも珍しいことではないの



かもしれない。

こんなところにキツネが現れて交通事故にでも遭わないか？ 食べ物はあるのか？ と心配になったが、それはきつといらぬ心配、人間のある種の驕り<sup>わご</sup>ではないかと思つた。たぶん、キツネのほうこそ思っているはずだ。

「お前たちは大丈夫か？」

街に出てきたキツネは、嗅覚を全開にし、視覚と聴覚の感度を上げて、引き締まった体で、いつ襲われるかわからない危険に備えながら、細心の注意を払って歩いている。そんな彼らが、滅多なことではケガをしたりトラブルに巻き込まれたりしない。なぜなら、彼らが動物としての能力と機能を、日々を生き抜くために、しっかりと使い切っているからだ。

一方、私たちときたらどうだろう？

そうでなくても彼らに劣る耳をイヤホンや携帯電話でふさぎ、動きやすさよりファッションを優先させた靴を履き、身を守るための手を荷物やバッグ、歩きながらの飲食に取られ、前を見るはずの目は、昨日のことを考えている。都市生活で心配なのは、むしろ私たちのほうだ。

ロンドンオリンピック・パラリンピックのメイン会場となるオリンピック・パークは、ロンドンの東部、ストラトフォードに建設された。かつてこのあたりは、古い工場跡などが荒れたまま残され、犯罪も多い、危険な地域とされていた。数年前、建設中のオリンピック・スタジアムを見に行ったときには、人影もまばらで、うわさ通り荒涼としたエリアだった。

ところがいまは、オリンピック・パークを中心にたくさんの商業施設が集まり、スポーツ、文化、ファッションの拠点として、新たなロンドンの名所に生まれ変わっている。

五輪の開催は、これまで良い意味でも悪い意味でも、都市の再開発、インフラの整備に貢献してきた。各種のスタジアムや競技場の建設、道路や鉄道といった交通網の整備、



たくさんの来場者を迎えるための商業エリアや宿泊施設の拡充……。五輪を通じてこれを開催する都市は、都市機能のさらなる充実を図り、世界に自分たちの街をアピールしてきたのだ。それもまた、五輪の歴史であり、世界最大級のスポーツイベントが持つ大きなパワーだった。

しかし、21世紀に入り、こうした都市開発を原動力にする五輪のあり方も、大きく変わろうとしている。

テーマは、環境に優しい五輪の開催。

既存のスポーツ施設を活かし、自然や環境を破壊する新たな工事をできるだけ控える。建設から、再利用へ。ハードからソフトへ。五輪の開催意義は、箱物建設が牽引する経済的發展から新たな価値観の提案へ。低コストでより環境に優しい五輪を目指すことで、これからの五輪とスポーツのあり方を再構築する方向に向かっている。

ロンドン五輪の開会式・閉会式が行われるオリンピック・スタジアムも、人の体をモ

チーフに、「筋肉が人体を支えるのと同じ構造」で造られている。スタジアム自体が、人間と環境をテーマにしているのだ。

変わりつつある五輪開催のあり方。その一方で変わることのない五輪の魅力がある。それは、人類の記録への挑戦だ。肉体の持つ可能性を私たちはどこまで広げていくことができるのか。タイムではなく勝ち負けを争う対人的な競技であっても、技の開発や技術の向上はとどまることを知らない。

これまで五輪という舞台で、数々の記録が塗り替えられ、さまざまなドラマが生まれってきた。それは、4年に一度しか開催されないということに大きな理由があるだろう。

1984年ロサンゼルス五輪で金メダルを獲得した男子柔道（無差別級）の山下泰裕。日本は1980年モスクワ五輪への参加をボイコットした。

モスクワ五輪を振り返ってこう言っている。

「モスクワオリンピックについて語れということとは、

僕にとって最愛の人の死を語れと言っているのと同じです」



悲痛な言葉だ。五輪を目指す選手にとって、4年に一度の開催は、それほど恋い焦がれ待ちわびていた舞台なのだ。

だからこそ、選手たちはこの戦いに賭けている。

これまで培ってきた力を、ここで一気に爆発させる。

世界中の注目を集め、国の期待を背負い、己のプライドを賭けて、世界最高峰の選手たちが激突する。しかも、その舞台は4年に一度しか用意されていない。襲われるプレッシャーは想像を超えたものだ。しかし、だからこそ選手たちの力が最大限に引き出される。究極の緊張のなかで、人間のまだ見ぬ可能性が発揮される。五輪で素晴らしいドラマが生まれる理由はそこにある。

五輪に言葉はいらない。肉体の躍動そのものが言葉でありメッセージだ。世界中の人が、国を越え、言語や文化の違いを忘れてこの祭典に酔いしれることができるのも、スポーツそのものが言語になっているからだ。五輪を楽しむのに、多くの解説や言葉は不要だ。

観て感じる。

それを基本姿勢にしたほうが、五輪から受け取れるメッセージは、より確かで深いものになるだろう。肉体や五感で感じ取るメッセージ。私たちは言葉に頼らなくても、本来そうした情報をキャッチできる能力を持っている。それは、夜のロンドンを闊歩かつぽするキツネにも負けていない。ただ、近頃は使わなくなっているのだ。

五輪には、肉体から発せられた言葉が溢あふれている。

私が五輪を観ていて感じる魅力は、こうした「本能の叫び」のようなものだ。

キツネにも負けない嗅覚や、動物的な洞察が勝負の世界にはある。

それを感じ取る意味においては、選手たちが戦いを終えた直後に肉体から出す言葉に耳を傾けることを勧めたい。勝つても負けても、そこにはあらゆるものが凝縮されている



る。そして、ちょっとした短いフレーズに真実のアスリートやスポーツの本質が現れたりする。

1996年アトランタ五輪。

このとき男子サッカー日本代表は、グループリーグ初戦でサッカー王国・ブラジルを撃破する。ゴール前の混戦からこぼれ球をゴールに流し込んだのは伊東輝悦だった。後に「マイアミの奇跡」と呼ばれるゲームだ。

この試合でゴールマウスを守っていたゴールキーパーの川口能活は、ゲーム後の興奮の中で言った。

「試合に集中して、誰がゴールしたか覚えてないんです」

川口がそのシーンを見逃したわけではない。

チームスポーツにおいて、誰が点を取ったかということは重要なことではない。ブラジルから先制点を奪った。川口が試合の中で記憶したのは、そのことだけだったのだ。

後は、勝利のためにこの得点を守り抜く。余計なことにまったく気を取られていない極度の集中が、川口のこの言葉に表れている。

2000年シドニー五輪。

男子柔道、60kg級で金メダルを獲った野村忠宏も同じようなことを言っている。

「どんな技をかけたのか。どう動いたのか。まったく覚えていないんです」

私が、五輪に多くの言葉は不要だという意味は、彼らのこうした状態にある。それを言葉で聞いても、覚えていないことがしばしばあるのだ。同じように、試合直後に話したことを、選手たちがまったく記憶していないということもよくある。「そんなことを言っていましたか？」と自らの発言を、テレビや紙面で後になってから知る人もいる。

それは、緊張と興奮のなかで、彼らは頭で考えた話ではなく、肉体から出た叫びのようにそれを口に行っているからだろう。



多くの言葉は不要と言っておきながら、前置きがいぶん長くなってしまった。

さあ、五輪という肉体の森に、キツネと一緒に入っていきましょう。

そこには、忘れていた体の底からの興奮がある。

想像を絶する重圧を背負いながらも、それを跳ね返す勇氣がある。

動物のように本能をむき出し、相手に襲いかかる野性がある。

ぎりぎりのところから、起死回生を遂げるたくましさがある。

自分を知ること、壁をぶち破る知性がある。

そして、言葉を失うほどの落胆もある。

五輪という舞台で必死に戦うアスリートの姿と言葉に、前向きな何かを感じていただきたい。それを願ってこの本を記すことにしました。

※文中、アスリートおよび指導者の敬称を、省かせていただきます。

## コンテンツ

はじめに オリンピックとは何か？ ……………

(3)

## 🏅 第1章 「背負っている」者はやっぱり強い！

苦しいときは、私の背中を見なさい ……………

澤穂希

(27)

もつときれいな、輝いたメダルが欲しかったんですが、

私の人生の中で金メダル以上の経験をさせてもらえました ……

浜口京子

(33)

オリンピックのプレッシャーなんて、

斉藤先生のプレッシャーに比べたら、

屁の突っ張りにもなりません ……………

石井慧

(40)



## 第2章 限りなく「動物」のように、限りなく「自然」に

バレリーナのように投げたい

.....室伏広治

(74)

ケガしていても、勝つ方法はあるはずだ

.....古賀稔彦

(60)

泣いて上手になるんやったら、  
私が代わっていくらでも泣いたげる。  
泣いてもその分疲れるだけやで

.....井村雅代

(53)

これは一生懸命やって  
負けたら仕方ないという戦いじゃない。  
絶対に勝つんだ

.....宮本慎也

(46)

気持ちいい。ちょー気持ちいい。……………北島康介 (80)

目の前のバッターを打ち取ってやると思う一方で、  
このまま試合が永遠に続けばいいな、なんて考えていたんですよ。

ずっと試合が続いても、私は投げられるって……………上野由岐子 (86)

すごく楽しい42・195キロでした！……………高橋尚子 (92)

いままで生きてきたなかで、一番幸せです……………岩崎恭子 (98)

子どもに恥じないよう、プレイすることを  
心がけていました。20年かけて銀メダルが獲れた。

あと20年かけて金メダルだね……………山本博 (104)



### 第3章 敗れたときに本当の強さがわかる

サッカーに勝っても、試合には負けている。

それが日本人の弱さ ..... 本田圭佑

(117)

弱いから、負けた。それだけです ..... 篠原信一

(124)

胸を張って3位の表彰台立ち、胸を張って日本に帰ろう ..... 宇津木妙子

(130)

途中で、こけちゃいました ..... 谷口浩美

(137)

勝っておごらず、負けて腐らず。

諸君たちのためのオリンピックだった

と思うために有終の美を飾ってください ..... 長嶋茂雄

(143)

勝って泣いたのは記憶にない……………吉田沙保里  
(150)

## 第4章 「自分を知る」者だけが輝きを放つ

初めて自分で自分をほめたいと思います……………有森裕子  
(167)

最高でも金、最低でも金……………田村亮子（谷亮子）  
(173)

試合を待っているとき、いつもは緊張するんですけど、  
今日はワクワクした。

いままでやってきたことが自信につながりました……………谷本歩実  
(179)



記録はいつでも出せるが、

オリンピックは4年に一度しか勝てない。

勝つことだけが目的だった

鈴木大地

(185)

アジアの代表として獲れたメダル。

個々の能力ではなく、チームワークで獲れた。

これまで一緒に走ったすべてのメンバーに感謝したい

朝原宣治

(193)

楽しむために来たんじゃないんです

福原愛

(200)

**おわりに**  
**メダリストの言葉はなぜ心に響くのか？**

.....

(207)